

「砂防遺産の地域がつなぐ絆——赤谷川と万内川の砂防交流会」開催される！

メディア砂防編集部



3月14日(土)から15日(日)にかけて、新潟県妙高市で行われた「万内川砂防公園ファン倶楽部」と「田倉川と暮らしの会」の交流イベントを取材してきた。

前者は、もう本誌でもお馴染みのおおりの歴史的砂防施設を活用した催事を取り仕切り、大いに地域を盛り立てている組織である(2007年10月号、2008年10月号を参照)。後者は、「福井のアカタン」と聞けばピンとこられる方が圧倒的であろう、これまた歴史的砂防施設を核として地域活性を進めている、全国を代表するような存在である。この2つの集まりが交流をはかり、友好をさらに深め、互いを刺激し合う。そんな場が面白くないはずはなく、事実、期待以上に密度の濃い有意義な会合であった。

この交流イベントは、「砂防遺産の地域がつなぐ絆」赤谷川と万内川の砂防交流会」と名づけられていた。

発端は、平成15年にさかのぼる。この年の3月、大正時代に築堤された万内川の砂防堰堤11基が、国の登録有形文化財に指定

された。当時、施設管理を担う新潟県妙高砂防事務所長であった眞田弘信さんは、「これをきっかけに何かできないか」と考えていたところ、福井県に同じような条件の地域があり、そこで活躍する人がいることを知る。さっそく10月には、現在「田倉川と暮らしの会」の事務局を務めるその人、田中保士さんを講師に招いて勉強会を開いた。翌年の平成16年6月には万内川の一行がアカタンを訪問、現地視察やシンポジウムに参加するに至り、その後約5年間、顔を合わせる機会は持たれなかったものの、連絡はとぎれることなく続いた。そして、満を持して今回の日を迎えたというわけである。

ともあれ、今回の交流会の様子は来月号で詳しく報告するが、1日目は万内川の現地見学と歓迎交流会、2日目はお互いの活動報告などが行われたことだけはまず記しておく。また、先述の眞田さんが、これとは別に同じように力を注いでいる地すべり地域での活動についても、紹介したいと思っている。ご期待ください。

砂防遺産の地域がつなぐ絆

あかたにがわ
ばんないかわ
赤谷川と万内川の砂防交流会

福井のアカタン

新潟・妙高



万内川の砂防堰堤群

先月号の<さぼう掲示板>でお知らせしたとおり、3月14日(土)～15日(日)に新潟県妙高市で行われた「万内川砂防公園ファン倶楽部」(以下、「ファン倶楽部」)と「田倉川と暮らしの会」(以下、「暮らしの会」)の交流会について報告する。ともに「砂防遺産」を有し、それを地域づくりの核として活動する2つの組織が、この交流から互いに何を学び取れるのか——。2日にわたり60名前後を集めて実施されたメニューを振り返りながら、そのヒントを探る。

◆現地見学会

本来なら雪がまだ深く残る時期だが、全国的に高温を記録したこの冬、開催地周辺も例年に比べさほど積雪がない。しかし、この日は天気があまりはつきりとせず、ときどき吹雪いたりしていた。

ほぼ定刻通り、今回の会場となる友楽里館にゲストの暮らしの会の一行を乗せたバスが到着すると、ファン倶楽部の案内でさっそく万内川砂防公園に向かうことになった。少しせわしなく、交流の第一ステージが始まった。

現地に着いても空模様は不安定なままで、肌寒い。一様に傘をさしたりヤッケを着込んだりし、まずは公園入口にある施設内の案内板を前に、ファン倶楽部会長の佐藤晃さんから概要の説明を聞いた。その後、ポイントごとに整備されている見晴台などをバスで巡り、代表的な砂防堰堤を見学していた。ファン倶楽部メンバーから工法や

歴史に関する解説があれば、暮らしの会メンバーは熱心に質問を投げかけた。写真撮影にいそんだりしていた。

一行が登録有形文化財の堰堤4基が連続して見えるビューポイントにいた折、ちょうど晴れ間がのぞいてきた。そこで全員集合し、すかさず記念撮影に興じた(先月号に掲載されたものがそれ)。それからは、それぞれのペースで辺りの山々の風景も楽しみながら徒歩でくだり、雪も舞い始めてきて会場に帰るバスに足早に乗り込んだ。

◆歓迎交流会

見学会から戻ると、三々五々と会場内の温泉に向かい冷え切った身体をあたためた。歓迎交流会の開始時間がきて一堂が大広間に集まると、最初に、妙高地域に伝わる郷土芸能「春駒」が地元有志によって披露された。これは、祝いがあったときの唄と踊りで、ユーモア溢れる仕草が笑いを誘い、またたく間に皆をリラックスさせてくれた。

それが終わると、いよいよ今回のメインイベント(?)である交流会にだれ込み、互いの挨拶の交換が行われた。まず、ファン倶楽部側からは副会長の丸山幸夫さんが「アカタン、万内川ともに(災害からの)復興活動は集落の男女総出で行われた血と涙の結



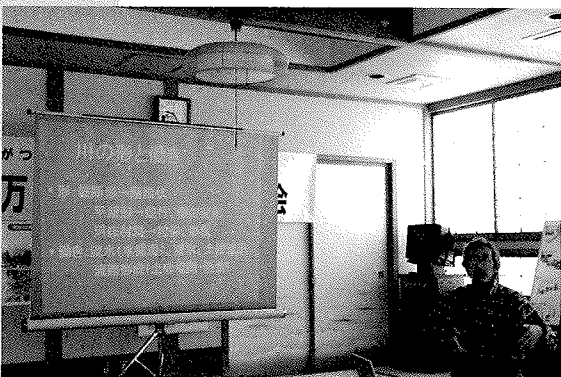
佐藤会長による万内川砂防公園の概要説明



春駒の披露



「仲人」真田さんのスピーチ



澤田さんの講演

晶。先人への敬意の心を末永く継承していく必要がある」と訴えると、会長の佐藤さんは歓迎の言葉とともに「将来的には若い人たちが世代をこえて付き合いを継続してもらいたい」と願いをこめた。暮らしの会代表の伊藤喜右エ門さんは、それを受け先に登録有形文化財指定されていた万内川に対して「先輩」と呼びかけ、「今後も砂防施設の利活用手法の指導を」と締めくくった。

乾杯の音頭は、両者を巡り合わせた元新潟県妙高砂防事務所長・眞田弘信さんが務めた。「今回の交流会は結婚披露宴のようなもの」と表現、仲人らしく「なれそめ」を改めて述懐し杯を

かかげた（「なれそめ」の詳細は先月号を参照）。いっばいの大広間は一気に賑やかとなり、長く愉快な夜の幕開けとなった。

◆活動報告会

一夜明け、朝9時に活動報告会が始まった。発表者の面々が「まだ胸のあたりがムカムカして…」などと揃って前置きするのが何だかおもしろい。

報告会の口火を切ったのは、前京都大学防災研究所教授で現在はNPO法人山の自然文化研究センター理事長である澤田豊明さんの講演であった。澤田さんは、暮らしの会のメンバーとして参加しており、砂防の研究者の立場

から川の形とはたらき、砂の流れ方、土石流の発生条件などについて、易しい言葉づかいで話された。

続いて、ファン倶楽部と暮らしの会の複数のメンバーから、立場に応じた活動内容の紹介があった。両者ともに、地道に砂防施設の維持管理などに努めながら、地域外からの団体客を積極的に招きいれ、自然体験や農業体験と交えて治山治水の大切さを伝えているという。県や地元自治体、民間企業とも連携しながら、外にどんどん開いていこうとする前向きな姿勢が印象的だった。

◆交流会取材を終えて

災害という負の歴史を抱え歩んでき

た地域同士が、それぞれ発想を転換して絆を繋げていこうとするこうした試みは、他に類を見ないと思う。その影にはキーマンたちの努力があり、先人への敬意を忘れない人々の熱い思いがある。

いずれにせよ、このように「砂防遺産」が地域を越えた人々のネットワークの中心にあるとは、無条件に素晴らしいことだ。今後は、「砂防遺産」を持つ別の地域とも繋がり、より大きな輪が広がっていけばいい。眞田さんではないが、あちこちで「結婚披露宴」が開かれ、地域を盛り立てていけばいい。我々編集部も、そのためにできる協力は惜しまないつもりだ。